

ご挨拶

東京矯正歯科学会

会長 本吉 満

COVID-19 も落ち着いてきているようですが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか？ このコロナ禍から抜け出して元通りの生活に戻れますように心よりお祈りしております。

さて、2022 年度秋季セミナー開催の運びとなりました。今回は「生涯における口腔機能管理」と題しまして、3 名の先生方にご登壇いただくこととなりました。はじめに小児歯科の分野から浜野美幸先生に「生涯の口腔機能を保つために小児期にできること」と題して、小児期の口腔機能発達不全症への対応と、口腔から体全体の健康につながる小児歯科領域で展開している取り組みについてご紹介いただく予定となっています。そして、高橋 治先生には「矯正歯科治療と MFT の効果的な連携—機能と形態の長期安定性を目指して—」と題して、矯正歯科治療と MFT の効果的な連携を行うために必要なポイントについてご紹介いただき、良好な口腔機能と形態を生涯にわたって維持するための方策についてお話しいただきます。最後に老年歯科補綴学の分野から上田貴之先生に「オーラルフレイルの予防は小児期から—高齢者の口腔機能評価と口腔機能管理—」と題して、高齢者の口腔機能評価の方法や、口腔機能の加齢変化、そして機能の低下に対する口腔機能管理について詳細にお話しいただく予定となっています。

矯正歯科臨床において、咀嚼や嚥下がうまくできなかったり、構音の異常があったり、口呼吸などの機能的な問題を有する患者に多く遭遇します。こういった口腔機能不全による矯正歯科治療への悪影響が近年注目され、口腔機能が小児期から老年期の生涯にわたって健康であることが、咬合と顎の成長発育や、その安定性の確保において非常に重要であると考えられています。今回は小児期から成人、そして老年にいたるそれぞれの時期において口腔機能管理を効果的に実践されている 3 名の著名な先生にお話を伺えることをたいへん楽しみにしております。

ご講演をご快諾いただいた講演者の先生方、そして本セミナーの開催にご尽力いただいた西井 康学術委員長をはじめ、委員の先生方に心から感謝申し上げます。

参加登録された日本矯正歯科学会認定医の方は、例年のセミナーと同様に更新ポイント（5 ポイント）が付与されます。

事前参加登録

●2022年11月1日（火）17時まで

Web 参加をされる方は、必ず事前参加登録手続きを行ってください（セミナー開催 3 日前までにセミナーを視聴いただくための Zoom URL をメールにてご連絡させていただきます）。

11 月 1 日（火）17 時以降は当日登録扱いとなりますので、セミナー当日に会場受付にて参加登録手続きをお願いいたします。



今後のご案内

●2023年東京矯正歯科学会春季セミナー

日時：2023 年 4 月 13 日（木）

会場：有楽町朝日ホール

●第82回東京矯正歯科学会学術大会

日時：2023 年 7 月 13 日（木）

会場：有楽町朝日ホール

詳細は決まり次第学会ホームページに掲載いたします

東京矯正歯科学会

〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-43-9

一般財団法人口腔保健協会内

TEL 03-3947-8891 FAX 03-3947-8341

2022年

東京矯正歯科学会 秋季セミナー

生涯における口腔機能管理

モデレーター：西井 康 学術委員長

講演者：浜野 美幸 先生

高橋 治 先生

上田 貴之 先生

開催日時：2022年11月10日（木）
18：00～20：10（予定）

開催方式：ハイブリッド方式
現地会場（有楽町朝日ホール）
配信（Zoomライブ配信）

※オンデマンド配信はございません

会費：会員 無料 非会員 ¥3,000

参加登録方法：事前参加登録または
当日現地登録

浜野 美幸 先生

1986 年 東京歯科大学卒業
1990 年 東京歯科大学大学院（小児歯科）修了
2003 年 千葉歯科医院院長 現在にいたる
東京歯科大学小児歯科学講座非常勤講師
昭和大学歯学部客員講師
日本小児歯科学会（常務理事・専門医指導医・関東地方会
会長）
全国小児歯科開業医会理事



高橋 治 先生

1986 年 日本大学松戸歯学部卒業
1986～2000 年 日本大学松戸歯学部歯科矯正学講座
2000 年 高橋矯正歯科クリニック（世田谷区）開設
日本矯正歯科学会認定医・指導医・臨床指導医
IAOM（国際口腔顔面筋機能学会）認定口腔筋機能療法士
日本大学松戸歯学部兼任講師
日本口腔筋機能療法（MFT）学会顧問



上田 貴之 先生

1999 年 東京歯科大学卒業
2003 年 東京歯科大学大学院歯学研究科修了
2019 年 東京歯科大学教授
日本老年歯科医学会常任理事（総務担当）・専門医・指導医
日本補綴歯科学会理事・広報委員会委員長・専門医・指導医



生涯の口腔機能を保つために小児期にできること

生涯にわたり自分の口で食べ、楽しく語り合えることをだれもが望んでいます。そのためには小児期に適切な口腔機能発達と、よい生活習慣を身につけることが大切です。健康長寿の礎は小児期にあるといっても過言ではないでしょう。しかし、現在では多くの子どもたちに口腔機能発達の問題が判明し、2018年に「口腔機能発達不全症」の病名が新設されて公的保険で対応可能になりました。さらにコロナ禍により、感染対策として今後も続くと考えられるマスクの常用により、口呼吸の増加が懸念され、マスク着用では、相手の表情を理解しにくい、言葉の獲得の遅れや正しい食べ方の習得、コミュニケーション障害も問題になり、保育現場では表面化しています。

本疾患の対応として、口腔機能発達の障害となる口腔習癖を早期に発見し、中止の支援・指導を行うことで、口腔周囲筋の筋力・筋圧を適正化することが挙げられますが、口腔習癖のなかでも、約3割の子どもに認められ、自然には改善が難しいとされている口唇閉鎖不全については就学前に介入することが望まれます。しかし、保護者も気づいていないことが多い、医療のみならず、保育・教育・福祉など他職種の方にも関心をもっていただけるよう情報を共有し、取り組みを推進していくことが重要です。

本疾患の予防・対応の基本は、正しい食べ方（咀嚼・嚥下）、鼻呼吸のよい生活習慣を身につけることです。特に「よく噛まない・早食い・かきこむ」などの誤った食べ方や悪い姿勢などは、高齢期では誤嚥や窒息などの生命にかかわる問題を惹起することからも、小児期からの繰り返し学習の重要性を感じています。また、低年齢児の運動訓練は、生活や遊びのなかで取り組み、子どもや保育者に負担の少ないものから進めますが、子どもが楽しく取り組むことにより、保育者や祖父母に健康観や健康行動が広がることも期待でき、口腔機能を育てる視点で子どもに接することは意義深いことと考えています。

講演では、口腔から体全体の健康につながるよう小児歯科領域で展開している取り組みについてもご紹介したいと考えております。

矯正歯科治療と MFT の効果的な連携 —機能と形態の長期安定性を目指して—

口腔機能と歯列形態との間には密接な関係があります。日常生活において、咀嚼・嚥下・発音などの口腔機能が良好に営まれるためには、歯列・咬合が好ましい形態であることが必要です。一方、歯列・咬合が長期間にわたり好ましい形態に保たれるためには、正しい口腔機能の維持が不可欠です。

歯列は、舌、口唇、頬などの口腔周囲筋から絶えず圧力を受けています。口腔機能に問題がある場合、歯列に及ぶ筋圧のバランスが崩れ、不正咬合、矯正歯科治療の後戻り、補綴物の不適合、歯周病の誘発など、さまざまな歯科的な問題が生じます。

口腔筋機能療法（MFT）は、個々の筋肉の機能改善や、咀嚼・嚥下・発音の機能向上を通じ、安静時における口唇・舌・下顎の正しい位置の習慣化を目指します。また、呼吸・姿勢・態癖など、口腔機能に影響を与える要素に関するトレーニングを必要に応じて行います。

矯正歯科治療と MFT を連携させることにより、形態と機能の両面からのアプローチを行うことができます。矯正歯科治療による形態の改善は、MFT による口腔機能の改善を効果的にに行いやすくします。MFT による口腔機能の改善は、歯列・咬合の正常な形態を維持するための環境を整えます。

「歯は食べるための道具です。矯正でよい道具（歯列）を作り、MFT で上手な使い方を学んでいきます」という表現を私たちは患者さん向けによく使います。そして「よい道具は、お手入れ（ブラッシング）と使い方（食べ方）がよければ長持ちしやすいです」と続けます。

本講演では、矯正歯科治療と MFT の効果的な連携を行うために必要なポイントを実際の治療例とともに紹介し、良好な口腔の機能と形態を生涯にわたって維持するための方策を考えたいと思います。

オーラルフレイルの予防は小児期から —高齢者の口腔機能評価と口腔機能管理—

高齢期の口腔機能低下は、オーラルフレイルと呼ばれている。また、歯科において口腔機能検査を行い機能低下が認められた場合には、口腔機能低下症と診断される。地域在住高齢者において、口腔機能低下症の罹患率はおおむね5割であることがさまざまな研究からわかっている。また、歯科医院の定期健診を受診した患者では、60歳代で6割が口腔機能低下症であることが報告されている。オーラルフレイルや口腔機能低下症の患者は、口腔機能の脆弱性が低下している状態ともいえる。では、老化の過程で、オーラルフレイルになる方とならない方の違いはどこにあるのだろうか。この疑問に対しての答えは明確にはなっていない。しかしながら、青年期や中年期ですでに機能が低下している人たちが多くいることもわかっている。これらの方は、機能が低下したのではなく、機能が十分に発達しなかった可能性が高い。その結果として予備能力が少ない状態であると考えられる。

老化は、病的な老化と生理的な老化に大別される。病的な老化は、全身疾患などのイベントの発生により急激に引き起こされることが多い。一方で生理的な老化は、ゆっくりと進行する。しかし、生理的な老化であっても、口腔機能が単調に右肩下がりに低下するわけではない。本セッションでは、高齢者の口腔機能評価の方法とともに、口腔機能の加齢変化がどのように表出し、進行するのかについて解説する。また、低下に対して行われる口腔機能管理のゴールの考え方についても説明したい。本講演が、生涯における口腔機能管理への理解が深まるきっかけとなることを期待している。